

---

# とある妖精少女の学園生活(ライフ)

橘天龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある妖精少女の学園生活<sup>ライフ</sup>

### 【Nコード】

N0578N

### 【作者名】

橘天龍

### 【あらすじ】

アンデルセン様の作品、とある吸血鬼始祖の物語の<sup>サーガ</sup>スピンオフ作品です。私はあちらの作者様のように細かい背景描写は出来ませんので、本格的なファンタジー小説が好きな方はブラウザバックして下さい

## 第1話：【邂逅】（前書き）

今回は試験的な意味合いもあるので主人公<sup>アリス</sup>の心理描写のみですm（  
——）m

第1話：【邂逅】

まー、なんと云いますか…大盛り上がりですネ。

あ、唐突ですみません。私はアリスティル<sup>1</sup> シュツルムハイゼン……  
長いのでアリスちゃんとかあつちゃんでもいいです。

んで、ここはエンデリック学園の魔法学科Sクラス。いわば魔法使いのエリートの巣窟 もとい、集まりなんデス。だから私も優秀なんですヨ？

ま、私のことはともかく。この時期に編入生さんだそうで……クラスではその話でもちきりなんデス。

なんでも試験会場の魔法が外に影響しないようにする結界をいともたやすく破壊したとか。

あの結界は普通は壊せないはずなので眉唾物デスが、**事実**は**事実**なわけ。

そんなデストロイな子が私達のクラスメイトになるってことでウチのクラスは騒然としているわけデス。

それからほどなくして担任の先生が来ました

何のへんてつもない連絡事項の後、件の転校生サンが呼ばれました

.....  
幼女？

わたしと同じ幼女ですか！？

むむう…見事なまでにキャラ被りデス。

まー相手は銀髪、わたしは金髪、相手はロリペったん、わたしはロリ巨乳と差違はありますガ。

何はともあれあの子が噂の転校生サンなのは間違いないようデス。

はてさて…どんなことから始めましょうか。

わたしは目の前のライヴァル（勝手に認定）を眺めながらこれから先の学園ライフに思いを馳せました

続く？

第1話：【邂逅】（後書き）

あちらの作品の世界観を上手く把握できていないのでかなり変な構成で申し訳ありませんm（――）m

次話以降はなんとか構成するつもりです（あちらほどは出来ませんが）

## 第2話：【友人】（前書き）

ここで主人公の設定を紹介します。アンデルセン様に送った設定と若干差違があるかもしれませんが、ご容赦下さい

名前：アリスティルⅡシュツルムハイゼン

声のイメージ：氷〇

性別：女

種族：エルフ

身長：132cm

3S：87・55・80

容姿：金髪のウェーブがかかった髪を太股まで伸ばし、後頭部に緑色の巨大なりボン（端が頭からはみでるくらい）を結んでいる。瞳の色は薄い緑色で、どこか眠そうなトロンとした目つきをしている。体型はアンバランスで胸が目立つ。所謂ロリ巨乳（笑）

性格：基本的におっとりだが、悪戯好き。でも自らが作った罠に自分でハマる、所謂墓穴を掘るタイプ。同じロリだからといって勝手にレティをライバル視している。

得意魔法：風系魔法と雷系魔法。他もそれなりに得意だが、前述の2属性は高位の魔法も使うことが出来る。

備考：大陸でもそれなりに位の高い（子爵くらい）シュツルムハイゼン家の三女。シュツルムハイゼン家は優秀な魔法使いを輩出してきた家系で中でもアリスは家系が始まって以来の天才と言われ、シュツルムハイゼン家がある地方ではエルフ族の始祖の生まれ変わりではないかと噂される存在だった。本人はそれを嫌い、家の権力が及ばない学園へさらなる魔法の研鑽を積むという名目で入学している。

アンデルセン様に送った設定よりも若干加筆修正しておりますm  
（ ） m



## 第2話：【友人】

わたしが今後の展望をほくそ笑みながら妄想していると、唐突に髪が軽く引つ張られました

??「アリス、独り言がただ漏れしてるわよ」

「フローラ、わたしの髪をあんまり引つ張らないで下サイ。ハゲたらどうするんですか」

フローラ「ハゲるほど引つ張ってないわよ」

わたしは教師がレティさんに説明しているのを見計らって後ろの人物に向かって振り返りました

わたしの友人の1人、フローラ「カドウケウス。銀髪のツインテールを腰まで伸ばし、瞳の色は青紫でツリ目、身長はわたしより高くてたしか160半ば、体重は…」

フローラ「コラ。今失礼なこと考えてたでしょう」

「…なんのことデスか?」

わたしが目を逸らすとツリ目を細めてジーツと見据えてきました。かなり怖いデス、はい。

フローラ「まあ…いつものことだからいいけどさ、今はHR中なんだから自重しなさい」

「わかっておりますヨ姉御」

フローラ「誰が姉御よ」

わたしがにへらつと笑って言うつとフローラは呆れた表情をしてため息をつきました

それからかの転校生：レティさんはわたしより2つ前に座りました。なんだか気だるそうですネ。

表情には出ていませんが、何となくそんな雰囲気グシマス。わたしはエルフの特性なのか、わたしだけなのか、相手の雰囲気を感じとる能力があります。

その能力故にレティさんがどこか気だるそうに感じたわけデス。

だからどうしたと聞かれてもそれはそれで困るのですが。

わたしがレティさんを穴が空きそうなほど凝視していると、こちらをチラッと見た気がしました。

ま、気のせいですネ

何はともあれ、休み時間。

件のレティさんはクラスメイトのミリアさんに話しかけられていました

??「アリスさ〜ん?どうなされたんですか?」

「なんでもないですよ、朔耶」

わたしがレティさんの様子を見てみると左側から間延びした声が掛けられました。

わたしのもう1人の友人、あきつしま さくや秋津嶋朔耶。

かなり東方の出身で独自の文化があるらしいデス。

特徴的な漆黒の髪をストレートにして太股まで伸ばし、目も同じように漆黒でタレ目気味、身長はフローラより少し高め、胸はわたしより大きいです。ま、わたしの場合は体型的にアンバランスなんです。

朔耶「アリスさん？どうしたのですか？」

「ん、何でもないですよ？」

朔耶が不思議そうに顔を右に傾けたのでわたしはとりあえずごまかしました

「ところで何か用デスカ？」

わたしが尋ねると朔耶が「あ」と再び間延びした口調で両手を合わせました

朔耶「明日から選択授業が始まるそうですが、アリスさんは決まりましたか？」

「んー、そうですね…わたしは風系と雷系ですネ。朔耶は決まっ

るんです力？」

朔耶「私は、水系と凍結系ですね。故郷くににいたときも、それらが得意でしたから」

朔耶が両手を合わせてにこにこしながら答えました

フローラ「あたしは炎と土系かな」

「実に予想通りですネ、姉御」

フローラ「どういう意味よコラ。あと姉御って言うな」

唐突に話しに入ってきたフローラにわたしが感想を述べるとツリ目を再び細めてわたしの両頬をぐにぐに左右に引っ張ってきました。かなり痛いデス

朔耶「まあまあ、フローラさんも落ち着いて」

フローラ「だってこのロリ子が」

なんですかそのネーミング。

たしかにわたしはロリであることには否定はしませんが、そのネーミングはどうかと思います。

何はともあれ、わたしがボケ、フローラがツッコミ、朔耶がフォロ―とこんな構図がわたし達3人の立ち位置になってマス。

そして件のレティさんはミリアさんとともに教室から姿を消してました

また挨拶出来ませんでしたネ、我がライヴアルに。

続く？

## 第2話：【友人】（後書き）

次話の前書きにてフローラの設定を書きます

### 第3話：【学園】（前書き）

アリスの友人その1。

名前：フローラ・カドウケウス

性別：女

声のイメージ：川澄綾○

種族：吸血鬼（混血種。ただし純血にわりと近い）

身長：165cm

3S：80・56・82

容姿：腰まで届く銀髪をツインテールにして、派手じゃない髪留めで纏めている。瞳の色は青紫。その為に純血種ではない。体型はスレンダー系。密かにアリスより胸がないことを気にしている。体重と胸の事を言われるとキレル。

性格：強気で短気。口より手が先に出るが面倒見がよく、悪態をつきながらもなんやかんやと手助けしてくれるタイプ（所謂ツンデレ）

魔法：火系と闇（でも闇は苦手）、吸血鬼の身体能力を生かした格闘術。

備考：アリスと同じ地方出身で幼馴染み。アリスの住む地方は種族格差が薄く、それ故に親交を深めていった。

### 第3話：【学園】

フローラ「それにしても…レティーシアさんって綺麗よね」

「そうですか？わたしと同じロリにしか見えませんか」

朔耶「そうですね、そこはかとなない魅力を感じます」

「そうですね？」

わたしは顔を傾けました。まあ…確かに強力なカリスマみたいのは感じマス。でも2人の言うような魅力というのまではわたしには感じませんでした

フローラ「じゃ、私は行くところがあるから」

朔耶「私も、所用があります」

「あ、はいデス。また明日」

わたしが小さく手を振るとフローラは軽く右手を挙げ、朔耶は深々と頭を下げて教室を出ていきました

「さて、わたしはどうしますかね」

去った2人を見送り、思案しながら食堂に繰り出しました

『御主人様』



ポーツとしながら食堂への道を歩いていると唐突に右側から声がかかりました

「（ウエンディですか、どうしたました？）」

相手の声に心で念じるように返事をしました。

わたしの契約精霊の1人、風の精霊のウエンディ。見た感じはわたしより頭1つ分高く、髪はわたしと同じ金髪でストレートロング、体型はかなり整ってイマス。ちなみに胸も大きいデス

『御主人様が感じた懸念ですが…』どこか言いづらそうに視線をさ迷わせ

『どこか異質なものを感じました』

言葉を探すように話しました

「（それってレティさんのことデスカ？）」

『はい、理由は分かりかねますが』

「（みんなはどう感じましたか？）」

みんなというのはわたしが契約している他属性の精霊さんデス。

普通は1人の魔法使いに1人（形状によって1体）デスが、わたしの場合は炎・水・風・土・光とほぼ全ての属性の精霊と契約してマス。まー、風と光の精霊とは仲良しなんで、風と光の魔法が得意といえますネ。

ちなみに名前は、炎の精霊がブレイズ、水がアクシリア、風がウェンディ、土がアーシアス、光がセリウスといいマス。

ブレイズ『アタシもウェンディと同意見だ！なんかあの銀髪ロリ、チート臭えぜ』

なんですか、チートって

アクシリア『チートかどうかはさておき、あの方の力は常軌を逸しているとかわたくしの直感が知らせていますわ』

前者のチートがどうのつといったのがブレイズ。深紅の髪に周りが僅かに火の粉が舞い、髪形がポニーテール、目の色はレティさん以上に真っ赤つかデス。服装は真っ赤で豪華なドレスで胸元が大きく開いたせくしいなタイプです。

後者がアクシリア。深い青色の髪を右サイドのポニーにしていマス。目の色はスカイブルーで服装は東方の着物というのを着ていマス。

「（今日は残りの子達が出てきませんネ）」

ウェンディ『今日はそんな気分なんでしょう』

「（アーシアスはともかく、セリウスは珍しいですネ）」

ここでおおざっぱに説明すると、ブレイズが口の悪い姉御肌、アクシリアが知のお嬢様、ウェンディが物静かな優等生タイプとみんなバラバラです。残りの子はまたの機会に。

と、わたしにしか見えない精霊とだべっていると目的地の食堂が見

えてきました。

「さて、何を注文しますか…おや」

わたしが注文する物を考えつつ座れる席を探していると見覚えがある人物を発見しました

??「……ああ、アリスティルか。お前も食事か？」

「はいデス。まだ何にするかは決めてませんガ」

わたしの存在に既に気付いていたのかすぐに話しかけてきました

彼女はレナス・クレール、何でも騎士を多く輩出する国の出身だそうデス。

見た目はというと、深緑の色の髪を1つに纏め…所謂ポニーテールという髪型デス。目は青紫色で意思が強そうなつり目、スタイルは長身でかなり整ってます。

何だか女の子に”お姉さま”と呼ばれそうなタイプですネ

レナス「……先ほどから呆けているがどうした？」

「ちょっと精神が旅してました」

レナス「そうか…」

レナスがわたしを可哀想な人を見る目になって呟きます

失礼デスね

レナス「何か注文するのではなかったのか？座る場所に困ってたのであれば私は相席で構わないが」

「ありがとうございマス、じゃあ注文してきますネ」

わたしはカウンターまで行き適当に決めた物を5人前ほど注文するとカウンターの人が目を丸くしてました

と、ここでわたしの補足説明しないといけませんネ。

わたしはぶっちゃけるト五体不満足デス。といっても深刻なほど重くはありません、言語障害：わたしの語尾が変なのはこのせいでして趣味じゃないんですヨ？

もう1つは異常空腹体質。常に腹ペコデス。

まー、これは五体不満足と違いマスね、わたしがこうなのは複数の精霊と通常ではありえナイ”専属契約”を交わしてるからデス。

その弊害として普通の言葉が喋りにくくなり、腹ペコなのは複数の精霊契約で魔力が常に消耗し続けてるためデス。

まー、わたしのことはさておき。出された5人前の料理を軽々運ぶわたしを他の生徒や一部の教師が奇異の目を向けてました

これも補足説明。複数契約による弊害は悪いことばかりではナイというわけデス。これもその1つでして、身体強化という類いのものデス

他にも色々ありますが、それはまたの機会に。

レナス「……相変わらず食べるんだな……」

「体質だから仕方ないんデス」

レナス「そうか……」

レナスは困惑した表情を一瞬し、すぐに元の真顔に戻りました

レナス「……ときにアリスティル」

「なんですか？」

レナス「明日の授業はどうするんだ？」

「そですネ……てはじめに風系魔法の授業に出ようかと思ってマスよ」

レナス「そうか。ならば私と同じだな」

「ああ、そういえばレナスは風属性でしタツけ」

レナス「お前は闇以外は全て使えるそうだがな」

「でもまんべんなく得意というわけではないデスヨ？」

レナス「普通はそれでも異常だ」

「そですかね」

わたしは会話と食事をしながらヤツのほうに異常だと我ライヴアル  
のことを漠然と思い浮かべてました

続く？

### 第3話：【学園】（後書き）

次話で朔耶の設定紹介。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0578n/>

---

とある妖精少女の学園生活(ライフ)

2011年7月29日12時22分発行